ゴロフキン使節団の陸路貿易構想

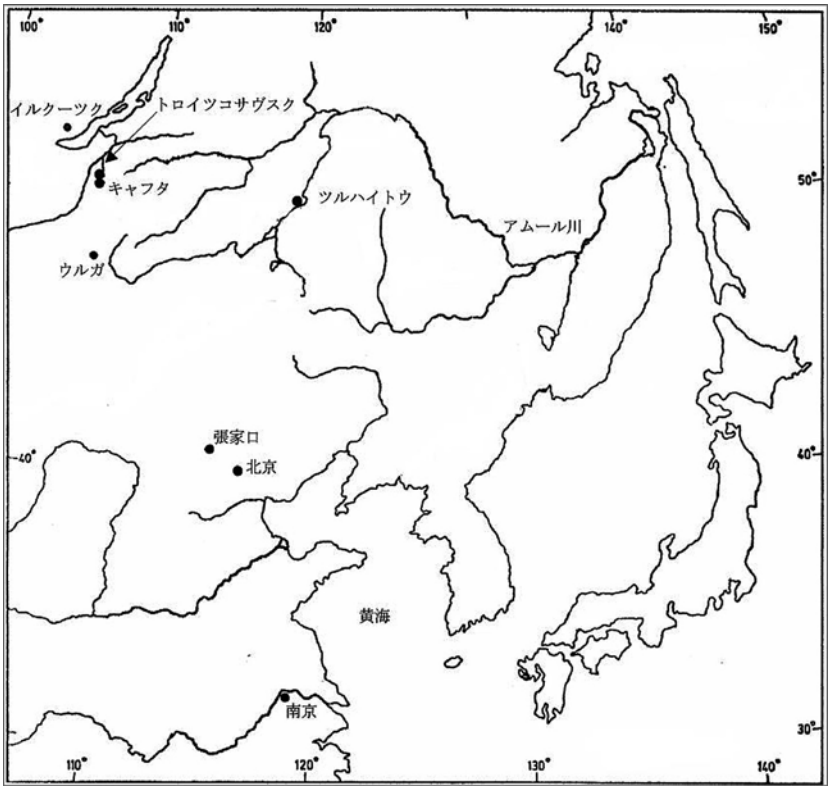
――19 世紀初頭のブフタルマ貿易を中心に――

中　村　朋　美

はじめに
1. 使節団派遣に至る経緯
2. ゴロフキン使節団への訓令
3. ブフタルマ貿易に関するゴロフキンの見解
おわりに

は　じ　め　に

1805～06 年にロシア帝国政府から清へと派遣されたゴロフキン Ю. А. Головкин 伯を特命全権大使とする使節団，いわゆるゴロフキン使節団は，その規模，かけられた費用，集められた人材の豊かさゆえに，ロシア内外から非常に注目を集めた使節団であった。しかし，この使節団についてはその名が世に知られている割には研究が少なく，その詳細は知られていない。その主な理由は，使節団が本格的な交渉に入る前の段階でつまずき，任務遂行に失敗したことにあるだろう。ロシア政府の目論見では，本来，使節団は北京で清朝皇帝に謁見し，準備した課題について交渉に入る予定であった。ところが実際は，使節団は三跪九叩頭の礼を巡って清側と交渉するもウルガ（庫倫）から先に進むことを許されず，ロシアに帰還する結果となった。また，当時はフランスでナポレオンが台頭した時期にあたり，ロシアもその脅威にさらされた。そのため，ロシア政府はこの危機に対応することで手一杯となって，清への使節派遣に関する事案を事実上棚上げした。以上のような事情で使節団が露清関係に変



ロシアの東シベリアから中国にかけての地域

化をもたらさなかったため，後世の歴史家はこの事件を研究する価値がないと判断したのである。

しかし，実はゴロフキン使節団は 19 世紀初頭にロシア帝国が目指したアジア政策を知るにはとても興味深い事例である。それはなにも使節の派遣先であった清との関係だけにとどまらない。ゴロフキンに与えられた訓令をはじめとする指令書には，清に関する事案だけではなく，他の国家や地域に関する事案も記されていた。すなわち，ゴロフキン使節団を研究することは，当時の露清両国間にあった問題を解明するだけではなく，アジア全般を見据えたロシアの政策を明らかにすることにも寄与するのである。

こうした問題関心を背景に，本稿では，19 世紀初頭においてロシア政府は

清を含めたアジアにおいて何に利益を見出し，それをどのように獲得しようとしたのか，特に陸路の貿易経路に関する問題を中心に論じたい。そのために，まず第1章で1805年にロシア政府が清に使節を派遣する経緯を明らかにし，次いで，第2章でロシア政府のアジア政策を把握するために，ゴロフキンに授けられた訓令の内容に注目する。さらに，第3章でゴロフキンは訓令が課した課題のうち，特に陸路貿易経路に関してどのような調査を行い，いかなる見解をもって交渉に挑もうとしたのかを検討する[(1)]。なお，本稿ではウルガでのゴロフキン及び第1秘書バイコフ Л. С. Байков と清側の庫倫辦事大臣たちとの交渉については取り上げない。その交渉内容についてはロシア側の日誌より知ることができるが，それを見る限り，その間，訓令の内容や貿易に関する交渉は行われていないからである[(2)]。

ゴロフキン使節団に関する先行研究としては，スカチコフ（1977）[(3)]，グレーヴィッチ（1979）[(4)]，ベスプロズヴァンニフ（1983）[(5)]，ヴォスクレセンスキー（1993）[(6)]，ミャスニコフ（1997）[(7)]，クエスティッド（1968）[(8)]，フレッチャー

---

(1) なおゴロフキン使節団に託された貿易構想のうち，東アジア海域における構想に関しては，拙稿「ロシア帝国と広東貿易―19世紀初頭の東アジア海域におけるロシアの貿易構想―」『関西大学東西学術研究所紀要』第50輯，2017，231-244頁を参照のこと。テーマの関係上，一部内容が重複することをご容赦願いたい。

(2) ［РКО］*Русско-китайские отношения в XIX веке,* том 1, Москва, 1995, док. No. 212, стр. 311-330.

(3) П. Е. Скачков, *Очерки истории русского китаеведения,* Москва, 1977.

(4) Б. П. Гуревич, *Международные отношения в Центральной Азии в XVII- первой половине XIX в., Москва,* 1979.

(5) Е. Л. Беспрозванных, *Приамурье в системе русско-китайских отношений,* Москва, 1983.

(6) А. Д. Воскресенский, “Китайские хроники о пребывании И. Ф. Крузенштерна и Ю. Ф. Лисянского в Гуанчжоу,” *И не распалась связь времен . . .,* Москва, 1993, стр. 151-163.

(7) В. С. Мясников, *Договорыми статьями утвердили : Дипломатическая история русско-китайской границы XVII-XX вв.,* Москва, 1997.

(8) R. K. I. Quested, *The expansion of Russia in East Asia, 1857-1860,* Kuala Lumpur, 1968.

（1978）[9]，矢野（1941）[10]，吉田（1974）[11]，葉（2009，2010）[12]，陳（2011，2013，2014）[13] が挙げられる。これらの先行研究は，『19 世紀の露清関係』第 1 巻所収の史料とその背景を整理したミャスニコフ（1997）と同史料集を網羅的に用いた陳（2014）を除いて，カムチャツカ経営とアムール川航行の関係やロシア船の広東入港など個別の案件に特化して扱うなど，ゴロフキン使節団派遣の全体像を把握したうえで，ロシア政府の構想のなかに個別案件を位置づけてその意義を論じたものではない。そのなかで，陳（2014）はゴロフキン使節団に関する全容を描こうとした点で他と一線を画するが，ロシア政府がアジア全体を視野に収めて提示した外交構想や貿易構想，とりわけ本稿が論じようとする陸路貿易については十分な検証を行っていない。

史料は，主にロシアの文書館史料集である『19 世紀の露清関係』第 1 巻（1995）[14]，『19～20 世紀初頭のロシアの外交政策』第 1 巻（1960）[15]，『ロシア・アメリカ会社と太平洋北部の調査，1799～1815 年』（1994）[16]，『中央アジアにおける国際関係』（1989）[17]を用い，中国側の史料も補足的に利用する。

---

(9) J. Fletcher, “Sino-Russian relations, 1800-62,” John K. Fairbank ed., *The Cambridge History of China*, vol. 10, part 1, Cambridge, 1978, pp. 318-350.

(10) 矢野仁一『満洲近代史』東京，1941 の第 3 章「ロシアの黒竜江左岸および沿海州占領」。

(11) 吉田金一『近代露清関係史』近藤出版社，1974。

(12) 葉柏川「戈洛夫金使団来華考論」『中国辺疆史地研究』19（4），2009，84-94 頁；同『俄国来華使団研究（1618～1807）』社会科学文献出版社，2010。

(13) 陳開科「失敗的使団与失敗的外交」『近代史研究』2011（4），85-104 頁；同「嘉慶中俄中段辺境防務体系及辺境地方層面的双辺交往」『中国辺疆史地研究』23（4），2013，67-78 頁；同『嘉慶十年：失敗的俄国使団与失敗的中国外交』社会科学文献出版社，2014。

(14) ［РКО］*Русско-китайские отношения в XIX веке,* том 1, Москва, 1995. 同史料集には中国語訳『19 世紀俄中関係：資料与文献　第 1 巻（1803～1807）』広東人民出版社，2012 がある。

(15) ［ВПР］*Внешняя политика России XIX и начала XX века : документы Российского Министерства иностранных дел,* том 1, Москва, 1960.

(16) ［РАКИТС］ *Российско-американская компания и изучение тихоокеанского севера 1799-1815 : Сборник документов,* Москва, 1994.

(17) ［МоЦА］*Международные отношения в Центральной Азии* : *XVII-XVIII*↗

なお，年月の表記は基本的にロシア暦（ユリウス暦）を使用する[18]。

1. 使節団派遣に至る経緯

1727 年にキャフタ条約を締結して以降，露清関係は貿易を主軸に成り立ち，諸々の外交・経済問題から 3 度の貿易停止（1762～68，1778～85，1785～92）と 2 度のキャフタ条約の補訂追加（1768，1792）を経ながらも 18 世紀のあいだ両国の関係は概ね良好で，キャフタでの取引は年々増大した。しかし，18 世紀も末に近づくと，シベリアの経済的発展を背景に[19]ロシアはさらなる貿易の拡大と貿易経路の開拓を模索し始めた。キャフタ条約体制では陸路国境のキャフタ（とツルハイトゥ）のみが露清貿易の窓口であり，オホーツク海からもヨーロッパ・ロシアからも遠く離れた地への商品の輸送には多大な時間とコストを要したからである。そのため，ヨーロッパ・ロシアからより近い陸路国境での貿易が可能であるか考えられるようになった。一方，海路についていえば，18 世紀末にはイギリスをはじめとするヨーロッパ諸国が広東貿易で多くの利益をあげており，シベリアの植民地建設者や毛皮商人はそれを知って，厳しい状況にあった自分たちの毛皮貿易の現状を変える打開策となるかと，海上輸送と広東貿易に期待を抱いたのである。

1803 年 2 月 13 日までに商務大臣ルミャンツェフ Н. П. Румянцев[20]はアレクサンドル 1 世（在位 1801～25）に覚書を提出し，北アメリカに探検隊を海路派遣することに触れた上で次のように報告した。ロシア・アメリカ会社が行う貿易を詳しく調べ，露清間の貿易を検討した結果，会社がいかに経営を強化し

↘ *вв. : документы и материалы,* Книга 2, Москва, 1989.

⑱ 18 世紀では 11 日，19 世紀では 12 日を加えると，現行の太陽暦になる。

⑲ キャフタ貿易がシベリアの経済的発展に及ぼした影響とロシア政府の見解については，Е. П. Силин, *Кяхта в XVIII веке,* Иркутск, 1947, стр. 83 ; Гуревич, Указ. соч., стр. 216.

⑳ 1802～14 年商務大臣を務め，1808～14 年外務大臣を兼任，1809 年から宰相の肩書を得，1810 年から国家評議会議長を歴任した。

キャフタにおける毛皮商品の価格を維持しようとしても，北アメリカから広東に直接毛皮を送っているイギリス人とアメリカ人に対抗できず，ロシア人自らが広東への道を開拓しなければ貿易面での前者の優位が続くだろう，と。その上で広東貿易の必要性を訴え[21]，また日本貿易についても北アメリカやシベリアで必要とする物資の補給手段として期待を示した[22]。

ここに出てくるロシア・アメリカ会社とは，カムチャツカから北アメリカにかけて植民地経営を行い，毛皮貿易を営んだロシア初の特権株式会社である。この会社は植民地経営者で毛皮商人であったシェリホフ Г. И. Шелиохв の会社を基として，1799 年にパーヴェル 1 世（在位 1796～1801）の勅書により成立した[23]。会社の経営は苦難の連続であった。特に会社が毛皮確保のためにカムチャツカと北アメリカに築いた植民地には，遠く離れたヨーロッパ・ロシアから物資を供給しており，それもシベリアの陸上輸送とオホーツク海沿岸の港オホーツクからの海上輸送に頼る状態にあった。そのため物資の補給は常に困難を極め，価格が高騰する上，食糧物資の不足は深刻で，しばしば飢餓に見舞われた。また主力商品である毛皮の輸送についても，彼らはアラスカで毛皮を確保しても，その後，まずその毛皮を海路オホーツク港まで運び，そこから陸路と河川路を通ってヤクーツクとイルクーツクを経由してキャフタまで運ばねばならなかった。このため，海上輸送にともなう危険のみならず，陸上輸送路の道中にある湿地や春秋の泥濘期が馬車輸送の障害となり，キャフタで販売に至るまでには多大な時間とコストを要した[24]。こうした状況のなかにあって，ロ

---

(21) 覚書作成日について，ВПР やРАКИТСは 2 月 20 日とするが，РКОは大臣委員会での検討時の印を根拠に 2 月 13 日より以前に書かれたとした。本稿は РКО によった。РКО, том 1, док. No. 1, стр. 42–43 ; ВПР, том 1, док. No. 157, стр. 386 ; РАКИТС, док. No. 28, стр. 51.

(22) РАКИТС, док. No. 27, стр. 49–51.

(23) 森永貴子『ロシアの拡大と毛皮交易』彩流社，2008，111–136 頁；同『北太平洋世界とアラスカ毛皮交易』東洋書店，2014，17–19 頁；А. Н. Ермолаев, *Российско-американская компания в Сибири и на Дальнем Востоке (1799–1871 гг.)*, Кемерово, 2013, стр. 61–70.

(24) 毛皮がアラスカの植民地からキャフタに運ばれるまでには 2 年以上かかり，海↗

シア・アメリカ会社の支配人たちは植民地経営を強化するために世界周航船の派遣を企画した。これによりロシア極東と日本や広東とを結ぶ海路の貿易を実現させて，植民地経営に必要な物資の安定的確保と輸送コストの削減を期待したのである。1802 年 7 月に支配人たちはサンクト・ペテルブルクでアレクサンドル 1 世に世界周航の実現を要望する嘆願書を提出した[25]。

世界周航計画自体はそれまでにもすでに海軍内部から出ていたが，1802 年にようやく実現に向けて動き始めた。それはロシア・アメリカ会社の要望と合致したからである。この後，イギリスから購入した 2 隻の船ナジェジダ号とネヴァ号に海軍将校クルーゼンシュテルン И. Ф. Крузенштерн とリシャンスキー Ю. Ф. Лисянский が艦長として乗り込み，そこにロシア政府より遣日使節に任命されたロシア・アメリカ会社支配人のひとりレザノフ Н. П. Резанов が合流した。2 隻の船は 1803 年 7 月 26 日にサンクト・ペテルブルク近くのクロンシュタット港から出航し，大西洋を西に渡って南米最南端のホーン岬を回り，太平洋を北上してカムチャツカに向かった。そして広東，日本，北アメリカでの諸々の任務を終えてインド洋，喜望峰を回り，1806 年 8 月にクロンシュタットに帰港した。前後 3 年間に及ぶ世界周航の旅においてクルーゼンシュテルンらが託された任務とは，広東を介しての中国南部との貿易の確立，日本との通商関係の樹立，ロシア領北アメリカの視察と援助であった[26]。

一方，ルミャンツェフは 1803 年 11 月 3 日付覚書で宰相兼外務大臣ヴォロンツォフ A. P. Воронцов に対し，清政府がキャフタ以外の陸路国境全域での貿易，及びロシアの広東貿易参入を受け入れるかを調べるために，友好の確立と

↘ 路では毎年，多くの船が破損したという記述もある。РКО, том 1, док. No. 53, коммент. 1, стр. 878. クルーゼンシュテルンによると，船の破損の原因は船体構造の貧弱さ，航海者の知識の欠如，貧弱な船舶で波の荒い大洋を行き来したことにあったという。クルウゼンシュテルン（羽仁五郎訳注）『クルウゼンシュテルン日本紀行』上，雄松堂書店，1966，25–27 頁。

(25) РАКИТС, док. No. 17, стр. 37–40 ; ВПР, том 1, док. No. 99, стр. 266–269.

(26) クルウゼンシュテルン（前掲）上下；加藤九祚『初めて世界一周した日本人』新潮選書，1993；森永（前掲 2008），155–158 頁；吉田（前掲 1974），186–189 頁；РКО, том 1, док. No. 53, коммент. 1, стр. 877–880.

ロシア皇帝の即位の通知を理由として清に使節を送ることを進言した[27]。広東開港を実現するために世界周航船の派遣と同時に清に使節を派遣することをアレクサンドル1世とロシア政府首脳に働きかけたのである[28]。

ルミャンツェフの主張を聞いたヴォロンツォフは，「私の記憶しているところでは，露清間の貿易はすでに3回中断している。これらの出来事は言うなれば，良く知られた中国人の粗野な言動と，特になんらかの新しいことを導入することに対する彼らの頑固さゆえの，ごく些細な理由から生じているのである。我々の側がこうした偏見を軽んじることが，彼らとの貿易による利益の損失をもたらしているのだ」[29] と消極的な姿勢を示しつつ，まずは清に使節を派遣する旨を通知し，その返答によってその後の対応を決めるとした。1803年11月にヴォロンツォフは外務省に対して元老院から理藩院へ送る文書を作成するよう指示をだし，清政府にアレクサンドル1世の即位を通知するためにロシアから使節を派遣することを伝えさせた[30]。これに対して清は，翌年，理藩院から元老院に返書を返してロシアからの使節を受け入れることを通知し[31]，その後，使節の官等，使節団の人数，到来の時期について事前に知らせるよう再三にわたってロシア政府に求め，使節は11月にロシアから北京にむかって出発し，庫倫に到着後，数日休息し，12月に北京に到着するのがよいと伝えてきた[32]。1804年3月10日付の庫倫辦事大臣たちから清朝皇帝への上奏文からは，皇帝が熱河の避暑離宮に滞在するその年の秋，もしくは皇帝の誕生月である年末に使節団を庫倫から送り出すようにという皇帝の命令が出されていたことが分かる[33]。しかし，結局ロシア側の準備が整わず，1804年秋にはいったん年内の派遣は見送られた。

---

(27) РКО, том 1, док. No. 5, стр. 46–47 ; ВПР, том 1, док. No. 229, стр. 544–545.

(28) РКО, том 1, док. No. 2–3, стр. 43–45 ; ВПР, том 1, док. No. 166, стр. 403–405.

(29) РКО, том 1, док. No. 8, стр. 49.

(30) РКО, том 1, док. No. 6–7, стр. 47–48 ; ВПР, том 1, док. No. 232, стр. 555–556.

(31) РКО, том 1, док. No. 18, стр. 56–58.

(32) РКО, том 1, док. No. 25, стр. 64.

(33) РКО, том 1, док. No. 20, стр. 59.

翌年になってロシア皇帝が特命全権大使 чрезвычайный и полномочный посол に起用したのは，ユーリー・アレクサンドロヴィッチ・ゴロフキン Ю. А. Головкин（1762～1846）であった。ゴロフキンは 1804 年末には大使選任を打診されていたが，1805 年 2 月 15 日に正式に特命全権大使に任命された[34]。ここでゴロフキンという人物について簡単に説明しておきたい。ゴロフキンは外交官の家系に生まれた。ピョートル大帝（在位 1682～1725）の最も近しい盟友の一人で，宰相と外務参議会長官を務めたガヴリール・イヴァノヴィッチ・ゴロフキン Г. И. Головкин は曾祖父である。イズマイロフ Л. В. Измайлов やヴラジスラヴィッチ・ラグジンスキー С. Л. Владиславич-Рагузинский が清に派遣されたのは，このガヴリール・ゴロフキンが上記の職にあった時代であった。ユーリー・ゴロフキンは 1762 年にローザンヌに生まれ，ヨーロッパで教育を受けた後，1783 年にロシアに戻り，すぐにピョートル大帝が創設したロシア最古の連隊であるプレオブラジェンスキー連隊に入隊した[35]。その後，侍従補，侍従となり，ナポリ公使を務めた後，パーヴェル 1 世の時代に 3 等文官として元老院議員に加わり，1800 年に商業参議会長官（～1807）と式部官長に登用された。さらに，1805 年に清への大使に任命されるにあたって 2 等文官の官等を求めて認められ，国家評議会議員に連なった。ウルガからロシアに帰還後は，業務継続のため特命全権大使の肩書を保持したまま，半年間イルクーツクに留まった後，1806 年の秋にサンクト・ペテルブルクに帰還した。1814 年以降は南ドイツのヴュルテンベルク公使，ウィーン公使を務めた[36]。

ゴロフキンが大使に選ばれた理由について，使節団に参加した 8 等官ヴィゲル Ф. Ф. Вигель は『回想録』のなかで，中国人は世界で最も儀礼にうるさい民であり，露清関係は政治より貿易の比重が大きいため，礼儀作法にかなった式部官長で商業参議会長官であったゴロフキンを派遣したのだと記して

---

(34) РКО, том 1, док. No. 52, 64, приложение II, стр. 87, 103-104, 848.

(35) ただしアゲエヴァは，ゴロフキンが 1782 年にプレオブラジェンスキー連隊に入隊したとしている。О. Г. Агеева, *Дипломатический церемониал Императорской России, XVIII век, Москва,* 2012, стр. 85.

(36) РКО, том 1, стр. 7, 845-847, 853 ; Агеева, Указ. соч., стр. 85.

いる[37]。上記経歴とあわせて考えると，宮廷儀礼に詳しく，幼少時にヨーロッパ宮廷で実地に外交を知る機会に恵まれたゴロフキンが，その経験を買われて大使に抜擢されたのだろう。

1805 年 3 月にロシア政府はゴロフキンの大使任命を清に通知し，同年 7 月使節団はサンクト・ペテルブルクを出発した。その間，ロシア政府は学術メンバーを含めた使節団員を選定し，贈り物を用意し，北京で使節が行うべき任務の内容について協議したのである。

2. ゴロフキン使節団への訓令

ロシア政府は使節団を派遣するにあたって，派遣目的や行動の指針を定めた訓令を与えるのが常であった[38]。ゴロフキンにも 1805 年 7 月 6 日付でアレクサンドル 1 世より訓令全 19 項が与えられた[39]。これはロシアが清と交渉するにあたっての基本方針であり，使節団派遣の目的を把握するために必要であるので，重要事項に的を絞ってその全容を紹介する。

1. 中国人が儀式に固執した場合，ロシア政府が使節派遣に期待する利益を犠牲にしないこと。
2. 露清間の貿易は現在キャフタでのみ行われ，そこでは両臣民のあいだで様々な商品が扱われている。交易をすべての国境沿いで自由に行うよう

---

(37) РКО, том 1, приложение I, стр. 766.
また任命の理由について，東シベリア総局の役人で歴史家のヴァギン В. И. Вагин は，ゴロフキンは外務副大臣チャルトリースキーの親戚で，そのチャルトリースキーのたっての願いで大使に任命されたのだと記している。ただし，この情報について真偽のほどは不明である。В. Н. Вагин, “Посольство графа Головкина в Китай в 1805 г.,” *Известия Сибирского отдела Императорского Русского Географического Общества,* 1872, том 3, No. 3, стр. 135 ; РКО, том 1, приложение II, стр. 848 ; Quested, op. cit., p. 11.

(38) Н. Бантыш-каменский, *Дипломатическое собрание дел между Российским и Китайским государствами с 1619 по 1792-й год,* Казань, 1882, стр. 425-455.

(39) РКО, том 1, док. No. 130, стр. 178-184. 引用文中の〔 〕は筆者の補足を示す。

北京の宮廷を説得することが甚だ望ましい。もし大使がその点で克服しがたい困難に遭遇したなら，キャフタ以外のブフタルマ Бухтарма 要塞の近くで様々な場所を設定することで，ロシアの交易に新たな別の道を開きさえすれば十分に利益となる。ブフタルマはキャフタよりもモスクワに 2000 ヴェルスタ〔約 2134 km〕近いうえに，ロシアの商人にとっても中国人にとってもより便利である。

3. 豊かな資源の源であるカムチャツカと北アメリカのロシアの村落は，彼らに不可欠な生活物質の不足に耐えている。それは現在利用する経路での物資の配送には多大な費用と非常な困難を伴うためである。その地域は居住者がいなくなり，ロシア臣民は海洋船を増強する機会を失い，日本そして広東を経由した清との貿易を強化することができないでいる。アムール川はロシアの辺境近くから流れ出てまさにこのカムチャツカに面してオホーツク海に流れ込み，そこに豊かさをもたらすことができると考える。そのために大使は道中や北京において，船がアムール川をオホーツク海へと通ることができるか，それはどのような船か，すなわち海洋船か平底船か，事情を探り出すことに努め，もしその川が航行可能であると分かったなら，この課題にすべての注意を払い，毎年せめて数隻のロシア船がアムール川を通過するのを許すよう，あらゆる手段を用いて清政府を説得するよう努めよ。しかしながら，もし海に出ることができない小舟もしくは平底船のみがこの川を通行できるのであれば，その場合，アムール川河口に我々の商品の集積所を設置することを要求する必要がある。そこでロシアから来た船が荷をおろし，カムチャツカや北アメリカのロシアの村落からやってきた海洋船が積荷を運んでいくためである。

4. レザノフが貿易を試みるために彼の管轄下にある船のうちの 1 隻を広東に派遣するよう指示することは，大使も承知しているところである。ロシアの船が初めてそこに現れることを不審に思われないように，大使はこの課題に関する清政府の考え方を調べる必要がある。大使は交渉中に，ロシアはすべてのヨーロッパの民に与えられている広東貿易の権利を行使してそこに 1 隻の船を送ったのであり，ロシアは今後も時折当地へ船を派遣

するつもりであると彼らに伝えること。大使は彼らにロシアの船が広東に来る許可を与えるよう請願する必要がある。

5. あらゆる方法で清政府からロシアと南京間の結びつきを整える同意をとりつけるよう努めよ。もし清政府を説得して特にロシア・アメリカ会社の船のみが接岸できる埠頭を指定することに成功したなら，この結びつきは黄海を介して便利に機能するだろう。黄海はカムチャツカやアメリカの海と非常に近いため，容易に毎年数回の交易を繰り返すことができるだろう。

6. 清との我々の貿易に関して，すべての課題を達成することはできないとしても，交換可能な様々な利益を考慮に入れて，少なくとも何らかの特別な権利を強く求めることが有益であると考えられる。官営キャラバンを中国の内地及び国境のすべての町に，あるいは北京とナウン[40]，以前は自由に行き来できたフトクトの居地〔ウルガ〕に限定して，自由に派遣することが，その利益だと考えられる。

7. もし双方の貿易の拡大を清政府に同意させることに成功したなら，アムール川河口のそばの集積所に貿易代理人をひとり，広東にひとり，さらに北京に外交代理人をおく必要がある。もし清政府がそれを拒否するならば，その時は少なくとも北京にいる掌院[41]がロシア商人のことに関して政府と連絡をとり，その代理人となる権利を獲得すること。

---

(40) ナウンは松花江の支流である嫩江沿いの地であり，1691 年頃から近村の名称をとってチチハルと呼ばれるようになった。北京に向かうロシアのキャラバンは，1689 年ネルチンスク条約締結後しばらく，1706 年にキャラバンのルートがウルガを通るモンゴル・ルートに変更になるまで，ネルチンスクからチチハルを経由するルートを通っていた。また，キャフタ条約締結によって辺境での貿易の場がキャフタとツルハイトゥに限定されるまで，ロシア商人はチチハルやウルガで交易を行っていた。吉田金一「ロシアと清の貿易について」『東洋学報』45（4），1963，41 頁；同『ロシアの東方進出とネルチンスク条約』近代中国研究センター，1984，302-303，337 頁。

(41) 掌院とは正教会の高位の修道司祭の称号であり，北京にいる掌院とは北京伝道団長のことである。北京伝道団（訓令第 9 項）は 18 世紀初めにピョートル大帝の主導のもと，北京にいるロシア人への布教を目的として，清朝皇帝の合意を得て設立された。

8. もし清政府が大使に新たな国境画定を行うよう求めたなら，次のように答えよ。それについて大使は全権を委ねられていない。とはいえ，ロシア政府は清政府と平和で親密な友好と同盟の関係にいることを強く望んでおり，清政府がロシア政府の要請に対して寛大な態度を示すなら，ロシア政府が新たな国境画定において譲歩するだろうことを大使は疑わない，と。さらに適当な時期までこのように国境画定を拒否することは，現在，ヨーロッパで混乱している状況下では必要であり，小隊であっても中国国境に振り分けることは許されない。国境画定はロシアの利益に容易く甚大な損害を引き起こす可能性がある。

9. 北京伝道団の存在価値を高めるため，新たに派遣される掌院に必要な指示を与え，その組織について調べること。掌院が北京から少なくとも年4回外務省に報告書を送る許可を清政府から獲得すること。

10. 北京の宮廷の政治状態や隣接する勢力との関係について調査すること。清政府がペルシアでのロシアの軍事行動〔1804～13年ロシア・ペルシア戦争〕に関していかなる考えを持っているか，また遊牧民や大ブハラから辺境を保持するためにどのような措置をとっているかを調査すること。

11. イギリスがインド方面から中国国境へと侵略を進めていることに関して中国人の危惧を探り，ロシアは北京の宮廷が望むのであれば，イギリスとの間にたって喜んで仲介を引き受けることを清政府に理解させること。

12. 清政府の軍隊の状況，すなわち数，砲兵隊の状態，彼らの技量，騎兵隊の質と遠隔地での食糧供給方法について密かに探ること。民の富裕さ，彼らが最も必要とするもの，満洲人やモンゴル人に対する中国人の態度，現在のダライラマやフトクトの気質，北京宮廷の彼らに対する態度，彼らが民衆の意識にもたらす影響力はどの程度まで清政府にとって危険となるかについて報告すること。

13. チベットでの貿易拡大のため，以下のことを清政府に求めること。チベットの住民の状況，産物，ロシアが供給できる物品について調べるため，ダライラマのもとへ赴くカルムィクの巡礼者には，これまで常に1人の監督官が同行した。しかし，清政府は，巡礼者は通過させるが，常に様々な

口実で監督官が自国の辺境に入ることを禁止した。ロシアの古い法に則れば，ロシア治下の遊牧民は監督官の同行なしには帝国国境外に出ることは許されず，清政府が監督官の同行を禁じたことで，カルムィクは巡礼できなくなった[42]。このように清政府に伝え，今後はカルムィクが監督官を伴って巡礼するのを妨害しないよう求めること。

14. ロシアの要求をかなえるため，清にとっても利益となることを納得させる交渉材料を清側に提示できるよう情報を収集すること[43]。

15. 特別な支出のため 20 プードの銀を様々な目方の地金で支出すること。

16. 中国人に対して敵対的態度をとらないこと。

17. 使節団員は忠誠と熱意をもって任務にあたり，厳格な規律を保つこと。

18. 大使の都合の良い言語で報告書を書き，外務副大臣〔チャルトリースキー A. A. Чарторыйский[44]〕に送付すること[45]。

---

(42) カルムィクのチベット行に関連して，1739～40 年の露清間の交渉に関しては，吉田（前掲 1974），162-164 頁。トルグート（カルムィク）はジュンガル部に圧迫されて西方へ移動して 1628 年頃にロシアの勢力下に入ったが，その後も 18 世紀半ばまでダライラマを頂くチベット仏教世界と関係を持ち続けた。M. Khodarkovsky, *Where Two Worlds Met: the Russian state and the Kalmyk nomads, 1600-1771*, Ithaca, 1992, pp. 33-34.

(43) 交渉材料として，外務副大臣チャルトリースキーは，①現在禁止しているいくつかの商品を販売する，②いくつかの販売商品と輸入品の関税を引き下げる，③1770 年に逃亡した 40 キビトカ〔天幕〕のカルムィクの永久国籍に関して公式に妥協する，④両帝国に属さない民に対する防衛的・攻撃的同盟を結ぶという 4 点を挙げた。РКО, том 1, док. No. 129, стр. 177. このうち，①に関して，輸出解禁を考えていた商品が何であったか記載はないが，当時のロシアは 1800 年法令によって貨幣，金・銀製品の輸出を禁じており，それらが解禁の対象であった可能性がある。吉田（前掲 1963）50，65 頁。また，③は 1771 年にトルグート（ヴォルガ・カルムィク）がヴォルガ沿岸からイリ地方に帰還し，清に服属した事件を指す。清との交渉においてロシアがこうした取引を行おうとすることは，これまで見られなかったことである。

(44) 公爵。ポーランド出身。アレクサンドル 1 世の若き友人たちのひとりであり，1802～06 年外務副大臣，1804 年 1 月～1806 年 6 月には実質的に外務大臣を務めた。

(45) ゴロフキンの報告書や書簡の多くはフランス語で書かれている。

19. 清政府と直接会議するために，使節団の構成員のうちから能力ある人物を全権公使もしくは代理大使として任命する全権を大使に与える。

以上が訓令の内容である。第 2，13 項はブフタルマ経由の陸路貿易[46]，第 3〜5，7 項は広東貿易を中心とした海路貿易に関係する内容で，その他の項目は政治的な問題について記しており，北アメリカからペルシアまでとアジア全域を視野に入れた壮大な外交・貿易構想がうかがえる。この訓令の趣旨は，清との国境沿いに自由貿易の拠点を複数設けることにあるが，もしそれが不可能ならば，キャフタ貿易を維持したまま，ブフタルマ貿易と広東貿易という新たな貿易経路を開くことにあった。本章では，紙幅の関係上，このうち新たな陸路貿易経路として浮上したブフタルマ貿易に焦点を絞って訓令の内容を検討したい。

ブフタルマ貿易に関する構想を主導したのは，使節団の派遣を進言したルミャンツェフであった。彼は訓令作成の準備中であった 1805 年 1 月 16 日付の上申書で，シベリアと新疆のあいだの貿易の現状とその将来性を訴えた。その上申書のなかの「ブフタルマだけではなく，イルティシュ要塞線[47]全域で交易を開く。ブフタルマでは，もし中国人が望むのであれば，定期市，もしくはキャフタにあるような同様の商業村を設置する」と題する項目のなかで，ルミャンツェフはまずシベリアと新疆のあいだで見られる交易の現状について，次のように述べている。

…昔，とりわけ中国の国境がロシアの国境にさほど近くなかったとき，もしくはより適切に言えば，モンゴルの民がその国境で閉じ込められていなかったとき，彼らが断言するように，交易はここで自由に行われていた。小ブハラ〔南新疆〕―― 現在，中国人の支配下にある ―― 出身の商人は

(46) ルミャンツェフはチベットをブフタルマの後背地のひとつと考えており（後述），第 13 項（チベット貿易）はブフタルマ貿易に関係する。

(47) ロシアは 18 世紀前半よりセミパラチンスクやウスチ・カメノゴルスク等の要塞をイルティシュ川沿いに築き，シベリアとカザフ草原との境をなす要塞線を築いた。一般に，イルティシュ要塞線を含む東側の要塞線はシベリア要塞線，西側の要塞線はオレンブルク要塞線という。

ロシアに商品を持参し，トムスクやクズネツクの町にまでやって来た。

今では，あらゆる交易路が清政府によって遮断されているため，この辺境での交易はほとんどとるに足りないものになっている。チュグチャク〔タルバガタイ〕とクルジャ〔イリ〕等のロシア国境に近い清帝国の町では，交易は中国人とタシュケント人以外の誰にも許されていない。しかし，この地方において中国人がロシア人と取引するという当然の結びつきが必要不可欠なので，タシュケント人，もしくはカザフ[48]のスルタン―彼らは中国に派遣されるキャラバンをも自分のものであると称している―が交易を行っているのである[49]。

このように，ルミャンツェフは，シベリアと新疆にまたがる一帯において，実際には国境をまたいで交易を行うほどの需要がありながら，タシュケント出身者をはじめとする中央アジアのムスリム商人やカザフのみがこの交易を行っていると現状を整理した。そのうえで，この地域での貿易にロシアが参入した場合の将来性について，次のように主張した。

クルジャとホブドの要塞間のように，相互の境界で自由に貿易する許可を与えるよう清の宮廷を説得できるのなら，そして，小ブハラとの交通が開き，それが安全ならば，疑いなく双方にとって利益が生じるだろう。なぜなら，この地方はキャフタから遠く離れているため，イルティシュ地域への商業資本の流れがキャフタ貿易を減少させることはなく，一方で，清の支配下にある小ブハラはモンゴルの他の省と隣接し，チベットやその反対側に位置するインドの村々と近いために，中国とロシアの富の中心となるだろうからである[50]。

---

(48) ロシア人は18世紀から20世紀初頭にかけて遊牧民族のカザフとクルグズ（キルギス）を区別せずにキルギズと呼び，前者を特定するときにはキルギズ・カイサク，後者を特定するときにはカラ・キルギズと呼んだ。本稿の史料中にはキルギズ・カイサクとキルギズの両方の名称が混在するが，どちらも同対象を示しているため，訳文ではカザフに統一した。

(49) РКО, том 1, док. No. 53, стр. 90.

(50) РКО, том 1, док. No. 53, стр. 90.

すなわち，ルミャンツェフは，清の公認の下でシベリアと新疆とのあいだで自由に貿易が行えるようになった場合，現在行われているキャフタでの貿易活動に損害を与えることのない新たな貿易経路を開くことができるだけではなく，その経路を通じての貿易は，今後のさらなる発展を見込めるものだと考えたのである。ルミャンツェフが新疆貿易に将来性を期待する見解を持つにいたったのは，上記引用からも明らかなように，この貿易の商圏となる地域が新疆と中国内地だけにとどまらず，モンゴル，チベット，インドなど周辺の隣接地域にも及ぶことが期待できたからであった。そのことはルミャンツェフがブフタルマという地に注目した理由とも絡んでくる。

ところで，交易を開く場所について先述の上申書で「ブフタルマだけでなく，イルティシュ要塞線全域」とあり，訓令にも「すべての国境沿い」もしくは「ブフタルマ要塞の近くで様々な場所を設定」（第 2 項）とあることからも分かるように，ロシア政府が貿易地として想定したのはブフタルマ 1 地点だけではなかった。では，複数あったにちがいない経路のうち，19 世紀初頭当時，なぜ特にブフタルマが新たな貿易経路の候補地として取り上げられたのだろうか。

ブフタルマは新疆との国境近くに位置し，オビ川の支流であるイルティシュ川沿いにセミパラチンスクからさらに上流に向かった渓谷に位置する。この地はロシアの脱走兵や分離派教徒が住み着くようになったことからロシア当局に知られるようになり，彼らの存在は清の地方当局も認知していたという[51]。現代ロシアの研究者クズネツォフによると，彼らは 1792 年にロシア当局の統治を受け入れ，その後，ブフタルマ川がイルティシュ川に合流する地点から 3 ヴェルスタ（約 3.2 km）上流にブフタルマ要塞を建設したという[52]。しかし，すでに 1763 年にエカテリーナ 2 世（在位 1762～96）は，清のジュンガル征服によって引き起こされたジュンガリア地域の情勢の変化がロシア方面に波及する

---

(51) В. С. Кузнецов, *Цинская империя на рубежах Центральной Азии,* Новосибирск, 1983, стр. 72.

(52) Там же. стр. 72.

ことを警戒して，ブフタルマ川がイルティシュ川に合流する付近に要塞を建設するよう指示を出していた[53]。このことから1760年代よりロシア政府はこの地域を清との境界となる地として軍事的に重視していたことがうかがえる。また，後に19世紀初頭のロシア政府が考えた貿易構想に先立つ例として興味深いことに，この時，エカテリーナ2世はブフタルマ要塞で「小ブハラと大タターリア[54]の他の地域との貿易，それからそれらの地域を通じて，インドもしくはムガルの国との貿易も」[55] 開くことができるのではないかと期待を示し，この計画を促進するために，ブフタルマ要塞と上述の地域の間で交易しようとする者に対しては向こう10年間，商品への課税を免じるよう指示を出した[56]。ロシア政府はすでに1760年代には，ブフタルマを経由して新疆を含めた中央アジア地域，さらにその先にあるインドも視野に入れた貿易を開く可能性を考えていたのである。

ブフタルマが貿易地に選ばれた理由については改めて後述するとして，ここでまずイルティシュ川上流地域，特にブフタルマを経由する貿易がその後どのような経緯で開かれようとしたのか，紹介したい。

1805年より以前の段階で，すでにロシアはチュグチャクとクルジャの町へ，またアルタイ山脈を越えてホブドの町へと人員を派遣し，アルタイ山脈を越える交通路の状況について調査を行っていた。1771年にはイルティシュ川沿いのウスチ・カメノゴルスク要塞からホブドまで陸軍中尉ネズナエフ Незнаев が派遣され，その後すぐに同要塞からバイアントの町まで陸軍少尉ヴォロシャニン Волошанин が派遣された。前者はイルティシュ川からブフタルマ川上流，ソゴ川 р. Сого，ゴンゴ・イシュル川 р. Гонго Ишуру を通る経路をた

---

(53) МоЦА, книга 2, док. No. 218, стр. 169 ; Гуревич, Указ. соч. стр. 201–203. グレーヴィッチは1761年にもエカテリーナ2世が同様の指示を出したとするが，在位期間と一致せず，年もしくは統治者名に誤りがある。

(54) 主にテュルク諸民族が居住する，アルタイからヴォルガにかけての広大な地域を指す。МоЦА, книга 2, док. No. 218, примеч. 1, стр. 238.

(55) МоЦА, книга 2, док. No. 218, стр. 173.

(56) МоЦА, книга 2, док. No. 218, стр. 173.

どったという[57]。逆に，中国人がロシア側の要塞にやってきたり，清側の哨所に駐屯する者たちがロシアとの交易を望んだりした例もあった[58]。例えば，1798 年にブフタルマとホブドのあいだに位置するチンギスタイ卡倫（哨所）に配属されていた中国人官吏がロシアやカザフと交易したことが，清側で問題となっていた[59]。また，1796 年 1 月にシベリア独立軍団司令官シュトランドマン Г. Э. Штрандман は外務省に報告書を送り，ブフタルマ付近に住むヤサクを納める農民から負債を集めるために 1795 年秋に当の村まで出向いたロシア商人から伝えられた情報を伝えた。それによると，ブフタルマに住む農民らはずっと以前からチンギスタイなど清の卡倫で中国人と交流を持っていた。当のロシア商人は彼ら農民を頼りとしてチンギスタイや他の卡倫まで行き，そこで清の官吏から，もしロシア政府側から清側の長に働きかけるのであれば，中国商人はブフタルマの上流に位置するナリム川合流地点付近の地でロシア商人と交易することを望んでいると伝えられたという。また，チンギスタイより東に位置するホブドの町には多くの商人が滞在しており，ロシアとの境界からホブドまでだけではなく，そこから北京までの道も極めて便利であるとも伝えられた[60]。この報告を受けて，エカチェリーナ 2 世は同 1796 年 4 月にイルクーツク・コルイワン総督セリフォントフ И. О. Селифонтов に対して，ウルガの清当局に働きかけて，ブフタルマ川もしくはナリム川合流地点付近で露清間の新たな貿易を開く可能性について，清政府がどのような見解を持っているのかを明らかにするよう命じた。しかし，セリフォントフは，清に対してそのような問合せをすることはロシアの望むような結果を得られないだけでなく，キャフタ貿易の閉鎖をも招きかねないと考えて，こうした働きかけを差し控えるよ

---

(57) РКО, том 1, док. No. 53, стр. 90–91.

(58) В. А. Моисеев, “Новые факты о русско-китайской торговле на Алтае в конце XVIII в. (по русским архивным материалам),” *Тринадцатая научная конференция «Общество и государство в Китае»,* ч. 2, Москва, 1982, стр. 220–221.

(59) 孟憲章主編『中蘇貿易史資料』中国対外経済貿易出版社，1991，197 頁。

(60) МоЦА, книга 2, док. No. 242, стр. 211–213 ; Моисеев, Указ. соч., стр. 220–221.

う提案の実行に異を唱えた[61]。一方で，シュトランドマンは 1797 年 2 月に今度は皇帝に自身の見解を上奏し，これに対して即位したばかりのパーヴェル 1 世は 1797 年 3 月にブフタルマ地方経由での清との貿易関係の発展に関する勅令を出した[62]。これを受けてシュトランドマンは清との交渉に入ろうとしたが，清政府から賛同を得ることはできなかった[63]。それでも 1803 年にブフタルマ要塞に税関が開設されたのは[64]，現実に人と商品の動きがあるのを見てのことだろう。同年，シベリア軍団査閲官少将ラヴロフ Н. И. Лавров は，ロシア商人がカザフのスルタンとの取引に参加し，その名で中国国境の町にキャラバンを派遣することを許可するようロシア政府に働きかけた[65]。この提案は実行に移されたようで，翌 1804 年にセミパラチンスクからキャラバンが出発し，カザフのスルタンの名のもと，チュグチャク，クルジャ，さらにはアクスにまで向かった後，無事帰還した[66]。またちょうどゴロフキン使節団が派遣された 1805 年にも，ラヴロフは，清の軍人がチンギスタイ卡倫から貿易の許可を求めてブフタルマ要塞にやってきたため，真偽を確かめるため将官をチンギスタイへ派遣したと報告している[67]。

こうした経緯をふまえて，ルミャンツェフもまたイルティシュ川上流付近での貿易の可能性を考えるようになった。訓令においては露清貿易を「すべての

---

(61) МоЦА, книга 2, док. No. 242, примеч. 3, стр. 242 ; Моисеев, Указ. соч., стр. 221–222 ; Н. А. Алдабекова, “Зарождение русско-китайских торговых связей в центральноазиатском регионе в конце XVIII– середине XIX в.,” *И не распалась связь времен …*, Москва, 1993, стр. 137.

(62) МоЦА, книга 2, док. No. 243, стр. 214 ; Алдабекова, Указ. соч., стр. 137.

(63) 『大清仁宗睿皇帝実録』嘉慶二年閏六月癸丑；『欽定大清会典事例』（嘉慶）巻七四六，理藩院・辺務・俄羅斯互市 ; МоЦА, книга 2, док. No. 245, примеч. 4, стр. 243 ; Моисеев, Указ. соч., стр. 222–223 ; Алдабекова, Указ. соч., стр. 137–138.

(64) Моисеев, Указ. соч., стр. 220 ; Алдабекова, Указ. соч., стр. 138–140 ; Гуревич, Указ. соч. стр. 216.

(65) *Энциклопедический словарь по истории купечества и коммерции Сибири,* том 1, Новосибирск, 2012, стр. 107.

(66) РКО, том 1, док. No. 53, стр. 91.

(67) РКО, том 1, док. No. 149, стр. 208.

国境沿い」（第２項）で開きたいとあるように，ロシア政府が最も求めていたのは，露清間の陸路国境沿いの全地域で自由に貿易できるようにすることであった。ただし，清政府からその同意を取り付けることが困難である場合には，ロシア政府は次善の策として場所を限定して自由貿易の場を開くべく交渉するよう命じた。しかし，キャフタと同時期に露清貿易の窓口として開かれたツルハイトゥが，その後，その役割を果たさなかったように，そもそもどこでも市場が成立するわけではなく，貿易地を開設する場は両国の民が多数集まるところでなければならなかった。だが，そうした土地は清との長い国境線においても限られていた。その点，前述のルミャンツェフによる上申書の題目が示すように，イルティシュ要塞線上の全域，そのなかでも特にブフタルマはイルティシュ川の水運のほか，馬やラクダ，荷馬車が利用できるほど交通路の状態がよく[68]，上述のように，以前から中国人のほか，カルムィクやカザフなど遊牧民も含めた人の往来もあった。またキャフタはロシアのなかで東により過ぎており，ヨーロッパ・ロシアから遠いため，そこへの交通は不便を伴ったが，一方のブフタルマはキャフタよりもヨーロッパ・ロシアから格段に近くに位置した。このこともロシア政府がブフタルマに期待をよせた理由のひとつであった。そしてなによりも，当時のロシア政府がブフタルマを重要視した理由は，先にも触れたように，後背地に新疆やモンゴル，さらにはチベット，中央アジア，インドが広がっていたことにあったと考える。

佐口透が「インドへの道」について語ったように，ロシア政府とロシア商人は17世紀半ばより主にヴォルガ川，アストラハン，ペルシアもしくは中央アジアを通って，高度な手工業技術と豊かな資源を有するインドと直接貿易したいと強く願っていた[69]。また，ピョートル大帝は1723年末にマダガスカルをサンクト・ペテルブルクとインドとの間の貿易中継地とするべく，そこへ探検隊を派遣する計画さえたてており，この計画は実現しなかったが，陸路だけで

---

(68) РКО, том 1, приложение III, стр. 862.

(69) 佐口透『ロシアとアジア草原』吉川弘文館，1966，90-92頁；В. В. Бартольд, *Сочинения,* том IX, Москва, 1977, стр. 371-374.

はなく，海路でもインドを目指す動きがあったのである[70]。この「インドへの道」が語られるのは概して 18 世紀前半までであるが，19 世紀初頭にルミャンツェフは上述の上申書で「北京から大いなるチベットを経由してカーブルまで通行する」と題して，次のように書いている。

ピョートル大帝の計画は常にペルシアを通ってインドへと交易を広げようとするものであったが，随分昔からこの国の内乱が妨げとなった。1717 年，当時のシャーのもとに派遣されたヴォリンスキー使節は，まずペルシアにロシア人の自由貿易を確立したが，1721 年には大帝は貿易計画を軍事計画に改めざるを得なかった。この頃，ロシア人はシャー・タフマースブと締結した条約によって再びペルシアで自由に貿易する権利を得，まさにインドに安全に向かう許可を得たが[71]，周知のように，ペルシアが平穏になるまでアルメニア人がその貿易に仲介者として入っており，貿易の支配権を持っていた。しかし，その後，再び反乱が起きて交易は絶え，アルメニア人は零落したのである。

中国の長期にわたる安定とそのような状況を促す当地の宮廷の行動原理は，おそらくは〔ロシアが〕チベットを経てインドまで到達することに関して，より良い成果を約束するだろう。

こうした理由で理藩院に次のように吹き込まなければならない。皇帝陛下はあらゆる穏やかさをもって自国を統治し，誓約を破るバーバー・ハーン〔ガージャール朝第 2 代シャー，ファトフ・アリー・シャー〕を戦争で従わせなくてはならず，その移り気な民と和合することもできなかった。グルジアはペルシアの領主の残忍さを回避して情け深いロシア皇帝の政権

---

(70) А. И. Андреев, *Очерки по источниковедению Сибири,* вып. II, Москва, 1965, стр. 27.

(71) ヴォリンスキー А. П. Волынский は 1715～19 年カスピ海とペルシアの間の地域事情，ロシアとペルシアの交易，インドとの通商関係の樹立の可能性を調査するために派遣された。その報告の結果，1722～23 年ピョートル大帝はペルシア遠征を行い，サファヴィー朝と 1723 年和親条約を結んだ。РКО, том 1, док. No. 53, коммент. 3, 4, стр. 881.

に服従したのである[72]。この事情によりロシア皇帝は親密な結びつきによって清帝国やカーブル政権との友好と和睦をより一層尊重し，揺るぎないものとしなければならないのである。このため，上述の政権に友好的な意図を説明するため，使節団から今回派遣された役人が安全にカーブルに行くことを清宮廷が許可し，今後もロシアの君主の臣民が障害なくその道を赴くのを許すよう望むのである[73]。

この記述より，19 世紀初頭においてもロシア政府が「インドへの道」を探っていたことは明らかである。このときは新疆やチベットとアフガニスタンを経由する道が考えられており，チベットへの貿易拡大（訓令第 13 項）もまたチベットだけを射程に収めたものではなく，この構想を念頭に置いたものであった。奇しくも同時期，18 世紀末から 1813 年にかけて，カフカースからインドを目指したグルジア人貴族ラファイル・ダニベガシュヴィリ（ダニベゴフ）Р. Данибегашвили（Данибегов）は，インドからさらにチベット西部，新疆を訪れ，そこからイルティシュ要塞線を通ってセミパラチンスクへと旅していた[74]。また，1810 年代にシベリア要塞線司令官グラゼナプ Г. И. Глазенап[75]はシベリア要塞線の町から新疆南部，カシミール，チベットへとキャラバンを派遣するなどの一連の政策を実施した[76]。これらの事実は，実際にこのルートの利用が現実味を帯びていたことを示している。当時のブフタルマは，このような構想をたてたときに，実際的かつ将来性のある貿易地として重要な意味を

---

(72) ロシアがカフカース領有を目指してガージャール朝と事を構えた 1804～13 年のロシア・ペルシア戦争のことを指す。訓令第 10 項の内容はこれに関連する。

(73) РКО, том 1, док. No. 53, стр. 89.

(74) Бартольд, Указ. соч., том IX, 1977, стр. 413-414 ; Гуревич, Указ. соч., стр. 219 ; *Русско-Индийские отношения в XIX в.,* Москва, 1997, док. No. 20, стр. 43-53. ダニベガシュヴィリはこの旅に関する旅行記をまずグルジア語で書き，ついでロシア語に訳して 1815 年モスクワで出版した。

(75) ロシア軍陸軍中将。1803～06 年カフカース要塞線軍事司令官を務めた後，1807～15 年にシベリア要塞線司令官，1815～19 年にシベリア独立軍団司令官を歴任した。

(76) ВПР, том 6, док. No. 59, стр. 160 ; том 7, док. No. 161, 231, стр. 392-393, 584-585.

もったのである。

3. ブフタルマ貿易に関するゴロフキンの見解

訓令で課題を託されたゴロフキンは，課題を遂行するためにどのような調査を行い，その調査を踏まえてブフタルマ貿易についていかなる見解を持つようになったのだろうか。

前述のゴロフキンの経歴から明らかなように，ゴロフキンは中国問題の専門家でもなかったし，中国関連業務に従事したこともなかった。そのため，任命を受けた後，ゴロフキンは任された諸々の課題について勉強し，調査や準備にあたった。

まずゴロフキンが取り掛かったのは，これまでの露清関係について知識を得ることであった。このために，彼はまず 17～18 世紀の露清関係に関する資料の写しを収集した。写しは外務省モスクワ中央文書館とイルクーツク県官房で取られ，外務省とゴロフキンのもとに届けられた[77]。また，ゴロフキンは外務省からバンティシュ・カメンスキーの著作『ロシアと中国帝国間の外交資料集』を入手した。外務省モスクワ文書館館長の職にあったバンティシュ・カメンスキー Н. Вантыш-Каменский のこの書は，1619～1792 年までの露清外交関係の確立と経過の歴史を扱った書である。この書が出版されたのは 1882 年にカザンでであったが，上記文書館所蔵の文書を用いて編纂されたのは 1792～1803 年にかけてのことであり，原本は 1803 年 3 月 30 日にモスクワで脱稿されたばかりであった[78]。ゴロフキンは彼に手紙を書き，この書物の情報の詳細さ，正確さに感銘を受け，今後の指針とすると伝えている[79]。

過去の事例の研究と知識の蓄積だけではなく，ゴロフキンは露清国境にむけてシベリアを旅する途中，実地に現地の視察も行った。そのひとつがマカリエ

---

(77) РКО, том 1, приложение II, стр. 848.

(78) Бантыш-каменский, Указ. соч. стр. I-IX.

(79) РКО, том 1, док. No. 127, стр. 172.

中国西側国境付近
(J. K. Fairbank, ed., *The Cambridge History of China,* Vol. 10, Part 1, Cambridge, 1978, p. 67 の地図から作成)

フ定期市[80]の視察である。定期市とは地元商人だけではなく，他地域からやってくる商人にも自由な取引を許可する場であり，そこでは中国をはじめとするアジアの商品からヨーロッパの商品まで多種多様な商品が取り扱われた。例えば，ロシア・アメリカ会社の代理人はシベリアの都市間を移動しながら，商品の買い付け，発送，荷の受け取り，販売の業務に従事しており，イルビートやマカリエフの定期市にも訪れ，キャフタで仕入れた商品を販売した[81]。ゴロフ

(80) ヴォルガ川水運を利用したロシア最大の定期市の一つである。1816 年大火災で焼失した後，定期市はニジニ・ノヴゴロドに移された。

(81) *Русские открытия в Тихом океане и Северной Америке в XVIII-XIX веках,* Москва, 1944, стр. 120-125 ; 森永貴子「イルクーツク定期市とシベリアの商品流通 ―― 1792～1839 年の史料を中心に」深沢克己編『国際商業』ミネルヴァ書房，2002，180-181 頁。この代理人コロビーツィン Н. Коробицын はネヴァ号に乗船し，北アメリカと広東にも赴いた。

キンもまたマカリエフでキャフタ商人をはじめとした多くのシベリア商人を目にし，彼らに貿易の状態やそれを拡大するための手段について質問をする機会を得た。その返答はゴロフキンの予想とは異なるものであり，彼は，商人たちが現在の交易状況に完全に満足しており，使節団が露清関係を改善しないばかりか，現在あるものを台無しにするのではないかという強い懸念を持っていることを知った。さらに，彼ら商人たちが，ゴロフキンがチャルトリースキーに直前に送付した至急便の内容，すなわちウルガのアンバンからの最新の書簡の内容[82]を知っていたことに強い衝撃を受けた。「商人たちは中国人のあらゆる主張を知っており，その主張が貿易に不愉快な結果をもたらすのではないかとすでに恐れている。私は彼らを安心させ，我々の国家間関係の維持を重視しており，それが私に指示された旅の主目的であることを納得させるため，できるすべてのことをした。恐らくこの噂は商人の間ですぐに広まり，その後さらに広まるだろう」と 7 月 30 日付で報告書を送っている[83]。

また，ゴロフキンは同日付で滞在先のカザンから前述のシベリア軍団査閲官少将ラヴロフに質問状を送り，清政府からブフタルマでの貿易を求める提案が出たと聞いたが，これに関して詳しく知りたいと説明を求めた[84]。ただし，この情報は誤解で，チンギスタイ卡倫からやって来た中国人の提案に関する情報であった。前述のようにラヴロフはこの件で調査のためにチンギスタイに人員を派遣したが，清政府が不服を唱えないか懸念しており[85]，提案が清政府から出されたものではないと察していた。ゴロフキンはさらに別便で国境の状況に関する質問状も送付した。これらの返信は 1805 年 8 月 20 日と 25 日付で返ってきた[86]。また，同じくラヴロフが 8 月 11 日付でシベリア総督セリフォント

---

(82) 庫倫辦事大臣らはロシア側に使節団随員の定員削減と贈り物の目録の提出を求める書簡を 1805 年 6 月 14 日付でイルクーツクに送っていた。РКО, том 1, док. No. 109, стр. 151–155. 随員削減問題については，葉（前掲 2010），94–98 頁；陳（前掲 2014），258–272 頁。

(83) РКО, том 1, док. No. 140, стр. 195.

(84) РКО, том 1, док. No. 141, стр. 196–197.

(85) РКО, том 1, док. No. 149, стр. 208.

(86) РКО, том 1, док. No. 149, 150, стр. 208–212.

フに提出した覚書「露清貿易の状況，及び国境の状況について」[87] もゴロフキンのもとに届けられた。

国境の状況に関して，ゴロフキンは次のことを知りたがった。①清とのロシア国境近くにいる民の本質はいかなるものか。②その軍事力，及びロシアと清に対する彼らの立ち位置はどのようであるか。③両帝国は現在どのような政治的関係にあるのか。④国境付近ではロシア人に対して中国人はどのような態度をとるのか。⑤中国人は自国の領土をどのように認識し，どのような措置をとっているか。⑥中国人の間にゴロフキン使節団派遣の影響は見られるか。⑦国境で密貿易は行われているか。仲介者は誰で，どのような商品を取り扱うのか。⑧ブフタルマ，もしくは他の場所での交易からどれほどの利益が得られるか。⑨ブフタルマから北京までの道に関する正確な情報はあるのか。⑩ロシア国境の防備はどのような状態か[88]。これに対してラヴロフは一つ一つに回答した。貿易に関するラヴロフの見解については後述する。

1805 年 9 月 10 日にゴロフキン一行はイルクーツクに到着し，10 月初めにキャフタ近隣の露清国境にあるトロイツコサヴスク要塞に到着した。しかし，清側との更なる折衝を終えて国境を越えるまで，2 か月以上をそこで過ごすことを余儀なくされた。その間，第 1 秘書バイコフはウルガで庫倫辦事大臣ユンデンドルジュ（蘊端多爾済）らと随員削減や叩頭の問題について話し合っており，その交渉に一応の決着がついたのは 12 月に入ってからであった。1805 年 12 月 2 日付でゴロフキン使節団総勢 124 名を 1806 年 2 月 2〜3 日，もし不可能なら 2 月 11〜12 日か 17 日に北京まで送るよう，軍機処から命令が届いた[89]。こうして，ようやく 1805 年 12 月 20 日に使節団は清領に入国し，1806 年 1 月 2 日にウルガに到着した。

ゴロフキンはトロイツコサヴスクで待つ間，調査結果を整理して自身の見解をまとめ，1805 年 12 月 16 日までに機密計画書「ゴロフキン伯に与えられた

---

(87) РКО, том 1, док. No. 146, стр. 204–206.

(88) РКО, том 1, док. No. 150, стр. 209–212.

(89) 故宮博物院編『清代外交史料』嘉慶朝 1，故宮博物院，1932，34 頁；РКО, том 1, док. No. 220, стр. 341.

1805年7月8日付ママ訓令に対する清政府との交渉計画」を書き上げた[90]。それは，①中国の内政状況に関する情報を得るための方法，②ロシアにとっての重要性に応じて交渉するべき10項目の調査，③中国人から同等の譲歩を引き出すことのできる項目の検討，④交渉を成功させるために利用するべき方法，もしくは交渉計画の大きく4つからなる。それによると，ロシア政府が貿易経路の開拓を使節団派遣の主要な目的としたように，ゴロフキンもまたブフタルマにおける商品集積所の設置，アムール川自由航行，ロシア船の広東自由入港の3点を優先的に解決すべき重要課題と位置づけた。ゴロフキンは，この計画書のなかで，訓令で託された課題について調査した結果，明らかとなった現状と問題点を論じ，両国関係の枠組みを念頭に置きつつ，どのように清と交渉するべきか見解を提示した。ここからは，ゴロフキンがブフタルマ貿易についてどのような見解を持ったのかを検討し，露清間の交渉を前にロシア側がどのような事情を問題ととらえたのかを明らかにしたい。

ブフタルマ貿易に関して，ゴロフキンは次のように述べた。

> この問題に関して意見は両極化する。事態に即してみると，ブフタルマに商品集積所を設置することは次のような利点がある。すなわち，現在カザフの耐え難い仲介を介して密かに行われている我々の清との貿易を合法化し，簡易化することができるだろう。しかし，中国人がどれほどの規模で立ち寄るのか，交易を行うのかを予測するのは難しい。なぜなら，彼らとの貿易はすべて商会 компания[91]を仲介して行われており，組織の特権

---

(90) РКО, том 1, док. No. 235, стр. 359-373. 訓令の日付（7月6日）とずれているのは，7月8日付チャルトリースキーの書簡を参考としたためである可能性がある。

(91) キャフタにおける中国側の商業組織を想定したと考えられる（後述）。
キャフタと隣接して築かれた清側の交易所，買売城では，山西省や張家口出身の商人らが広東の公行に似た商業組織を形成した。それはロシア語でフーズィ фузы と呼ばれ，中国語の鋪子 pu zi（小売店）を指すと考えられるという。19世紀の研究者トルセーヴィッチ X. Трусевич は，このフーズィを「компания（会社／商会）」と訳している。森永貴子「キャフタ貿易に見る露清商人の組織と商慣行」塩谷昌史編『東北アジア研究シリーズ⑪　帝国の貿易：18〜19世紀　ユーラシアの流通とキャフタ』東北大学東北アジア研究センター，2009年，73-75，83↗

と資金さえも厳密に定められているからである。彼らがロシアとの貿易のためにどのような手段を持っているかについていうならば，利益や交易の可能性を確信するには，この分野や彼らの富，生産，需要に関する情報があまりにも少ない。また，ブフタルマは疑いなくキャフタよりもモスクワに近いが，南京やカルガン〔張家口〕，他の商業地からはキャフタよりも遠いのである。

貿易に影響しうるあらゆることに最大限の慎重さを求めるため，現在，キャフタ貿易はあらゆる点で非常に有利である。やはりブフタルマに新たな集積所を設置することは，キャフタにとって危険な競争を生み出さないだろう。この新たな市場がキャフタと競争しうるようになるとは証明できないが，〔この市場が〕成功した場合には，先を見越した内部の法令によって競争を前もって防がなければならない[92]。

貿易の合法化とは，清とのあいだで貿易を公的に認めるよう取り決めることをいう。ゴロフキンがこうした見解を持つに至ったのは，ブフタルマ貿易やその周辺国境の状況について前述のラヴロフから説明と見解の提示を受けたことによる。ラヴロフによると，シベリアから新疆にかけての地域での貿易は次のような状態にあった。

西部地域の中国辺境諸都市におけるこの地方の中国人との貿易は，カザフのスルタンの仲介によって行われている。なぜなら，この国境では交易がカザフだけに許されているからである。それ故，ロシア商人はスルタンらの好意をとても高い値で買わざるを得ない。このスルタンたちは商品を運ぶキャラバンを中国国境へ自分自身の名前で送り届け，この商人をも自分に属する者とするが，道中，頻繁に様々な抑圧や強要行為を行う。その上，そのキャラバンはロシア国境から遠ざかると常に略奪の危険にさらされるが，護送するスルタンは力で略奪からキャラバンを守ることをしない。

↘　頁，注 47；劉建生，豊若非「山西商人と清露貿易」同上書，116-117 頁；Х. Трусевич, *Посольския и торговыя сношения России с Китаем* (*до XIX века*), Москва, 1882, с. 246.

(92)　РКО, том 1, док. No. 235, стр. 362.

キャラバンの主人はスルタンに属する者と見なされ，これ〔スルタンの行状〕について清当局に訴える権利をもはや持っていない。中国の町ではその貿易は官の側から行われ，私人とはカザフにも彼らの名で入った者にも許されておらず，そのため我々ロシアの商人にはその制限ゆえに儲けがない[93]。

このような不便で危険な状況にもかかわらず，この国境付近では貿易が途絶えることはなかった。その理由についてラヴロフは次のように説明した。

この地方の位置ゆえに，貿易は付近の県の商人の維持にとっても，様々な土地からやってくる商人にとっても完全に必要不可欠となっている。牛，馬，羊など，ロシア内部でカザフから必要なものすべてを手に入れる手段を提供しさえする。なぜならすべてのものが主にステップから〔を通って〕中国製品 —— それをクルジャやチュグチャクの町から入手し，この地の住民は自分の衣服に利用する —— に交換されるからである。このような理由で上述のあらゆる困難と制限を顧みず，彼らは自身の商売を続けているのであり，中国に最も近い数ある土地のうち，この国境で貿易を開く必要がある[94]。

すなわち，ラヴロフは国境をまたぐ貿易はシベリアでの物資の需要を満たしており，シベリア要塞線付近の経済活動にとって必要不可欠であるからだと説明したのである。18 世紀後半，カザフは清及びロシアの双方と貿易を行っていた。カザフは 1758 年以降 19 世紀半ばにかけて清よりウルムチ，イリ，タルバガタイ等にあった「貿易亭」という取引場で交易することを許され，馬，牛，羊などの家畜をこれらの都市に運び込み，清側が用意した絹織物，綿布，陶磁器，茶，銀などと交換した。一方，ロシアとは，シベリア要塞線の取引市場で家畜をロシアの織物や金属製品と交換した[95]。このようなカザフの経済活動に付随して形成されていたシベリアと新疆とステップをつなぐ商品の流通に，18

---

(93) РКО, том 1, док. No. 146, стр. 204.

(94) РКО, том 1, док. No. 146, стр. 204.

(95) 佐口（前掲 1966），235-246 頁；佐口透『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』吉川弘文館，1963，303-344 頁。

世紀末になるとロシア籍の商人が参入しようとし始めたのである。

こうした動きは，ロシア側に商業中継地をつくる動きを活発化させた。1795年以降，セミパラチンスク周辺では商品を保管するための集積所や商店が設置され，商人たちは代理人や従業員が住むための家を建て始めた。さらにセミパラチンスク近隣には商業村も開設され，そこでは自由にロシア商品をアジア商品に交換できた[96]。

しかし，貿易の必要性とその需要を説いた一方で，ラヴロフはブフタルマの現状について次のように報告した。清が貿易を公式に認めていない現状では，ブフタルマ税関付近での貿易は極めて細々としたものである。それは，商人たちが商品をもってキルギズ・ステップに出かけ，そこから中国の哨所に近づかねばならず，そこで行われるのは少量の取引であるからである。現状では貿易においてなんらの成果も予測できず，ブフタルマ要塞での税関の開設は無益なままである，と[97]。

ラヴロフから説明を受けたゴロフキンは，ブフタルマで商品集積所を開設して露清両政府が貿易を公認することで，商人らを法的保護下におき，貿易を簡易化できる，すなわち遊牧民を介さず露清の商人が直接取引できると認めた。また，ルミャンツェフが1805年1月の上申書でブフタルマに「キャフタにあるような同様の商業村」の設置を進言したのを受けてか，ゴロフキンもクルジャ等に置かれていた清の官営の貿易亭ではなく，キャフタと同様の取引場所をブフタルマに開設することを想定したようである。それというのは，前述の機密計画書でゴロフキンは，中国人との貿易は「商会 компания 」を介して行われると述べており，「組織の特権と資金さえも厳密に定められている」というこの「商会」は商品の等級と価格の決定，貿易戦略の徹底等の特徴をもつキャフタにあった中国側の組織と類似していることから，キャフタで機能した中国側の商業組織を想定したと考えられるからである。ゴロフキンはこれらの

---

(96) И. Земляницын, “Исторический очерк Семипалатинска и его торговля,” *Материалы для статистики Туркестанского края,* вып. IV, СПб, 1876, стр. 13.

(97) РКО, том 1, док. No. 146, стр. 204.

措置によってブフタルマ付近における貿易が拡大することを期待したのだろう。

しかし，その一方で，ゴロフキンは，中国商人の経済活動に関する情報が少ないこと，そして南京や張家口など中国の中心的商業都市からの距離が遠いことから，この貿易が成功するか確実でないことを不安要素として挙げた。ラヴロフもブフタルマから北京までの道について正確な情報を持っておらず，大まかな距離と移動日数を提示するのみであった[98]。

さらに，ゴロフキンは，ロシア政府にとって最大の懸念であった，ブフタルマ貿易がキャフタ貿易を脅かす競争相手となる可能性[99]にも留意している。キャフタ貿易との関係について，ラヴロフもまた，「私はこれ〔西側国境での露清貿易に関する先述の報告[100]〕がイルクーツクにおいて賛同されないだろうことをほぼ確信している。なぜなら，ブフタルマで中国人と貿易を始めることは愚かなことであり，これはただでさえすべての人が農業の代わりに運送業に従事しているイルクーツク周辺でただ荒廃のみを引き起こす，という古い考えを証明する文書の写しを私は昨年受け取ったからである」[101]と述べ，キャフタ貿易そのものがダメージを受けるだけではなく，それに付随するキャフタやイルクーツク周辺の経済にも打撃を与える可能性をも危惧する意見が，特にイルクーツクで根強くあることを紹介している。しかし，この意見に対してゴロフキンは，先の引用より分かるように，現状を考えるとキャフタの優位性が揺らぐことはないだろうと判断した。ただし，同時に，「内部の法令によって競争を前もって防ぐ」とともに，「一定額の商取引を制限し，ある品目の売買を禁止し，それら例外的特権によってキャフタの貿易を変えずにいる」ことはできると予防策を講じている[102]。

ゴロフキンは訓令で与えられた重要課題のうち，ブフタルマ貿易に関する課題が最も実現可能性が高いと考えた。それは清との交渉方法として，現在，条

---

(98) РКО, том 1, док. No. 150, стр. 211.

(99) РКО, том 1, док. No. 53, 129, стр. 90, 174-175.

(100) РКО, том 1, док. No. 146, стр. 204-206.

(101) РКО, том 1, док. No. 149, стр. 208.

(102) РКО, том 1, док. No. 235, стр. 368.

約に則って開設しているキャフタとツルハイトゥのうち，ツルハイトゥは収益が出ていないため，これを廃してブフタルマに置き換えることを提案することで，清政府との取引は可能だと考えたためであった。他の重要課題であるアムール川自由航行とロシア船の広東自由入港が完全にキャフタ条約の変更を求める交渉困難な提案であったのに対して，ブフタルマに商品集積所を設置する要求は，「最も〔キャフタ〕条約に則った，つまり清政府の不信，もしくは拒絶を最も引き起こさない要求」[103] であり，キャフタ条約体制の枠内で実現可能な変更だと考えたのである。

お　わ　り　に

チャルトリースキーが「アジアすべてを全体的な展望を持って見る必要がある」[104] とゴロフキンに心得を説いたように，ゴロフキン使節団に与えられた訓令は北アメリカからペルシアまでとアジア全域を視野におさめ，アジア各地域への市場参入にとどまらず，大国によるアジア地域の安全保障体制の構築までをも企画する，非常に壮大な外交構想であった。その訓令を受けたゴロフキンは調査を行って任務遂行に必要な裏付けを求め，ロシア政府が特に重要視した貿易経路の開拓に尽力しようとしたが，清領内の情報を入手できず，貿易経路開拓のための具体的方策を提示するには至らなかった。また，ゴロフキンは交渉方法についても非常に頭を悩ませ，「長年の中国人の行動は，今，我々に対して彼らには重要な要求はなく，同様に彼らは他の件で我々の助けもとりなしも必要ないということを示唆している。このことより，彼らは渋々交渉に向かうのであり，あらゆる関心や利益は我々の側にあるのだということを前提としなければならない」[105] と交渉の難しさを語っている。

そもそもネルチンスク条約にしろ，キャフタ条約にしろ，アムール地方への

(103) РКО, том 1, док. No. 235, стр. 367.
(104) РКО, том 1, док. No. 131, стр. 186.
(105) РКО, том 1, док. No. 235, стр. 361.

ロシア人の進出等，自国の領土を侵害された清がそれに対処した結果，またジュンガルのガルダンやツェワン＝アラブタンの侵攻でモンゴル情勢が逼迫し，清がロシアをモンゴルに介入させない必要に迫られた結果，成立した条約であった。すなわち，清の強い要求があってこそ，交渉の場が設けられたのである。しかし，19 世紀初頭においてロシア政府はキャフタ貿易への損害を忌避する姿勢を保ち，一方の清にとって 18 世紀半ばに乾隆帝がジュンガルを制圧して以降，強い懸念を抱かせる勢力は存在せず，前回までとは異なる状況にあったのである。

1806 年 2 月 2 日，清政府から退去を求められたゴロフキン使節団はウルガを去り，ロシア領へと戻った。しかし，ゴロフキンはまだ交渉を諦めたわけではなかった。1806 年 10 月までイルクーツクに留まり，広東にいるはずのロシア船の動向や国境の状況を調べたり，探検隊を派遣したり，第 9 回北京伝道団の派遣に携わったりと大使としての職務を全うすることに努め，使節団派遣の再開の可能性を探った。同様にロシア政府もまた構想の実現を諦めたわけではなく，その後，陸路貿易構想はシベリア当局に引き継がれることになる。

the person who bore this title carried out or conveyed an order given by the local ruler and collected tax. Moreover, we can point out the possibility that φρομαλαρο might have made work a person being in a lower rank and there might have been several φρομαλαρος at the same time in several provinces called by þαρο/þαυρο in the Bactrian documents.

We can also find that Sogdian prm'nδ'r played much the same role as Bactrian φρομαλαρο in the local society with the exception of tax collection. Along with the exception, prm'nδ'r had a function which Bactrian φρομαλαρο did not have, that is collection and distribution of commodities or livestock, such as grain, wine, sheep, etc. However, considering the fact that we completely lack knowledge about the tax system in Sogd, we could regard the above-mentioned function of prm'nδ'r as a kind of tax collection. If so, we could say that the roles of two officials were almost identical.

THE CONCEPTION OF THE OVERLAND TRADE HELD BY THE GOLOVKIN EMBASSY : FOCUSING ON BUKHTARMA TRADE IN THE EARLY 19TH CENTURY

NAKAMURA Tomomi

After the Kyakhta Treaty in 1727, the Russian Empire and the Qing Dynasty maintained relations based on trade, and the trade in the sole border town of Kyakhta increased. At the end of the 18th century, however, Russia attempted to increase its profits by expanding trade, and this request came to the fore when the Golovkin Embassy was dispatched to the Qing in 1805-06.

In this paper I consider the Russian government's conception of trade in Asia in the early 19th century, focusing on the issue of the overland trade route between Russian Siberia and Sinkiang of the Qing. Firstly, I illustrate how and why the Russian government dispatched the embassy to the Qing. I then analyze the instructions and the documents written by top Russian government officials in order to grasp Russian policy toward Asia. Finally, I examine research on the overland trade route and Yu. A. Golovkin's position on the matter.

The conclusions of this paper are as follows.

(1) The purpose of the instructions given the embassay was to set up commercial centers for free trade along the border between Russia and the Qing,

and if it was impossible, it was to open new trading routes, that for overland trade at Bukhtarma and that for seaborne trade in Guangzhou, while maintaining the Kyakhta Treaty.

(2) The reason why Commerce Minister, N. P. Rumyantsev, who played a leading role in drafting the concept for trade in Asia, emphasized the importance of Bukhtarma as a commercial center was that he felt merchants who came and went in this area would spread the market to extend beyond Sinkiang, to Mongolia, Tibet, Central Asia and India as well as China.

(3) As a result of his research, Golovkin decided that legalization of Bukhtarma trade enabled Russian merchants to enter the market directly and it did not cause damage to Kyakhta trade, but he could get no information about economic activities of Chinese merchants and commercial traffic in China, so he could not take specific measures to open the route.